

プロレタリアの文學運動

平 林 初 之 輔

一、プロレタリア文學の理論的起源

文學は、人間の精神的活動の諸形式のうちで、最も自由な活動の所産の一つであります。それは、全く文學者が任意に、氣まぐれにつくり出すものであつて、如何なる外部條件にも決定されるものではなく従つて、これを法則的に把握することは、絶対に不可能であるやうに思はれます。

文學に限らず、そもく一切の社會的現象が、非法則的な、偶然的なものであつて、これから、法則科學を打ちたてることは不可能であるといふ考へが、従來も優勢でありましたし、今日でも、社會現象の科學即ち社會學の成立を疑問とする人が少なくないのであります。

この問題に關して、フランスの社會學者タルド (G. Tarde) は、「社會法則」Les Lois Sociales といふ書物の序論の冒頭で、次の如き含蓄にとんだ文句を述べてゐます。

「歴史といふ博物館を巡覽して、様々な、珍奇な繪畫を次々に見て歩き、千差萬別の諸國民の間を旅行するとき、皮相なる觀察者の第一に受ける印象は、社會生活の諸現象は、如何なる一般的公式でも、如何なる科學的法則でも律することのできないものであり、社會學をこ

しらへやうとするが如き企ては一の迷妄であるといふ印象でありますけれども、星の空を眺めた太古の遊牧者や、植物の生命の神祕をさぐらんとした、最古の農民達は、空に明滅する無秩序な星光、千變萬化する氣界の現象、動植物の限りなく多様な形態等を見たとき、これと同じやうな印象を受けたこととありませう。而して、天文學、或は生物學といふ名稱のもとに、論理的に聯結された僅かばかりの意想によりて、天空や森林を説明せんとする考へは、若し左様な考へが彼等の心に浮んできたとしても、彼等の目には、荒唐無稽の骨頂と映じたこととありませう。實際、空界並びに處女林の内部に於ける複雑さ、事實上の不規則、外觀上の氣まぐれは、雜然たる人類の歴史の中に於けるそれ等に決して劣らぬのであります。」

タルドが、暗示に富んだ比喻をもつて言ひ表はした以上の主張は、社會現象が法則的に説明し得るものであるといふ信念を吾々に強課するに十分であります。而して、事實に於て、多くの社會學者は、今日、かゝる信念のもとに熱心に研究をはじめ、既に若干の成果を齎らしてゐるのであります。今日では、社會現象の科學の成立を疑うことは、單なる懷疑のために懷疑としか考へられぬのであります。

併しながら、文學は、前に述べたやうに、人類の精神活動のうちで

最も自由なものであるから、他の社會現象の科學は認めても、文學や藝術を科學的に説明することはできぬといふ考へが、理論的には根據がなくとも、感情に支持せられて、今なほ廣く流布してゐるやうに思はれます。

かくの如き、俗學的、常識的、沒論理的見解に對して、はじめ、文學藝術も科學的研究の對象となり得る一面を有することを、はつきりと、力強く主張した人は、テイヌ (H. Taine) であります。

彼は、その不朽の名著「藝術哲學」philosophie de l'Art の劈頭で、藝術作品は、所定めず吹く風のやうに藝術家の氣まぐれの所産であると考へられてゐるが、吹く風だつて、氣まぐれに吹くのではなく、一定の原因結果の法則によつて吹くのであると同様に、藝術作品も、やはり、作家の氣まぐれによりて生れるのではなく、種々の必然的條件によりて決定せられてゐるのであるといふやうな意味のことを説いてゐます。

彼は、多くの人が誤解してゐるやうに、藝術作品の價値を科學的に決定しようとしたのではありません。科學的に研究し得ないものまでを科學的に研究しようとしたのではありません。彼の研究方法が、あまりに科學的であるとか、あまりに冷やか過ぎるとかいふやうな、折衷的、俗學者的批難くらゐ、見當はずれな、無價値なものはありません。却つて、彼の研究の結果に間違ひや獨斷が含まれてゐるのは、それが十分に科學的でなかつたからであるといふべきではありません。

テイヌによりて、創められた藝術文學の研究方法は、廣汎な影響を與へたには相違ありませんが、これを發展させ、これを完成せしめるに十分な後繼者をもちませんでした。

プロレタリア文學は、その主張の理論的基礎として、文學の生起變遷を、科學的に、即ち因果的に解釋し説明せんとする企てを、復活せ

プロレタリアの文學運動 (平 林)

しめたものであるといふことができず。即ちテイヌによりてはじめてられた、科學的方法を發展せしめたものである、と見做すことができます。

二、史的唯物論による文學史の改造

しかしながら、科學的方法を尊重するといふ點に於ては、プロレタリア文學は、テイヌの流れを汲んでゐるけれども、その實質に於てはテイヌの説の祖述ではありません。テイヌの決定論のかはりに、史的唯物論を置きかへたのであります。

テイヌは、文學藝術作品を決定する三大要素として、種族 (Race) 環境 (milieu) 時間 (moment) をあげてゐます。然るに、史的唯物論は社會の變動を決定する要素として經濟現象を重視し、種族や地理的環境の如きは、これを無視するのではないが、「社會の變動」といふやうな、比較的短い時期の間に作用する力としては、これを抽象し去ることができると考へるのであります。又時間といふやうな要素は、甚だ漠然たる非分析的な、常識的概念であつて、純粹な時間は、何物をも説明し得る力ではないと見なすのであります。

かういふわけで、史的唯物論は、經濟條件をもつて、社會の變動の基本的要素と見なすのであります。

經濟條件が一定の高さまで進むと、社會に階級が発生し、それ以後は、經濟條件が變化するにつれて、社會階級の構成が變革し、この變革は、一切の文化形態に波及する。そこで、人類の文化形態の一つである文學藝術も、社會階級によりて決定的刻印を受けるといふのであります。即ち、史的唯物論は、從來全く、或は殆んど閑却されてゐた「社會階級」といふものを、地理的環境や種族などよりも遙かに直接的な力強い要素と考へ、これを文學藝術の變遷の研究にも適用せざる

を得なくしたのであります。

史的唯物論の光に照されて、文學の歴史はもはや従来のやうに、文學者の觀念や技巧の變化を孤立的に記述説明するものではなくなりました。或る時代の文學の思想的內容やその表現様式は、その時代の社會組織、社會階級の構成様式から必然的に決定されるものと映じて來ました。

たとへば、フランスに於ける古典主義の文學は、當時の宮廷生活、君主政治、並びにそれを生ずるやうにさせた經濟條件と密接な關係をもつてゐます。ロマンチズムの文學の勃興は、ブルジョア階級の勃興と對應してをり、ロマンチズムの文學上の形式破壊は、ブルジョア階級による舊政治的構成、舊制度の破壊と軌を一にしてをり、ロマンチズムの世界觀は、ブルジョアの階級の世界觀と符號してゐるのであります。

私は、かつて(大正十三年)「日本文學の背景及び前景」といふ一文を發表して、日本の近代文學が、如何に政治經濟組織の變遷、社會階級の構成の變化に制約され、隨伴してゐるかを指摘し、大體に於て、封建制度の治下に於ける町人階級の實力の充實とともに、貞享、元祿時代の町人文學が起り、新しい社會秩序に於て、ブルジョア階級が支配權を獲得するに及んで明治文學が誕生したとを述べておきました。

文學の品種の變遷もまた社會階級と密接な關係をもつてゐるのであります。たとへば、木村毅氏の「小説研究十六講」といふ書物には、小説といふ文學の品種が、平民階級(即ちブルジョア階級)と密接な關係を有することが詳細に説明せられてゐます。

從來の文學史をかくの如き見地から考察してゆくと、それから必然的に流れ出る結論は、文學の歴史を決定するものは、地理的環境とか種族とかいふやうな、地質學的、人類學的の要素ではなくて、もつ

階級的に綜合されたものが階級意識であり、階級意識に指導された、階級間の軋轢、衝突が即ち階級闘争であります。

そこで、階級對立を含む社會に於ては、單に經濟上、政治上の組織のみならず、一切の文化が——それにとつさはる個々人が意識せると否とに拘らず——階級闘争の陣列に配置され、個々人が好むと好まざるに拘はらず、一階級が他階級と抗争し、若しくは他階級を壓迫するための手段に用ゐられることは自然なことでありませぬ。

ブルジョアの社會に於ては、以上のやうなわけで、文學がブルジョア社會を支持するために用ゐられるのであります。繰り返していひますが、これは、個々人の意識を超越したものであり、普通の場合には、如何なる行政官も文學者に向つてブルジョア社會の支持につとめよと命令するわけでもなく、又如何なる文學者も、ブルジョア社會のために犬馬の勞をとらうと意識してゐなくとも、依然として、それをブルジョア文學であるといへるのであります。普通の場合に於ては、比較的寛大な検閲制度、出版法、新聞紙法等の法律でも、この目的をはたすのに十分なのであります。

此の點に於て、私は、ブルジョア文學を絶對的に「非人道的」な文學であるやうに見なしてゐる人々と意見をこゝにしてゐます。又その正反對に、「人道的」な文學がプロレタリア文學であると考へる人たちとも意見をこゝにしてゐます。

ヴィクトル・ユウゴオの「ミゼラブル」の如き不朽の名作、トルストイを感動させ、今日の多くのプロレタリアをも感動させてゐる文學でも、やはりブルジョア文學の範疇にいれることを私は辭しません。坪内逍遙博士の劃期的名著「小説神髓」の如きも代表的ブルジョア文學理論と見なすことに躊躇しません。

「ブルジョア」といふ言葉を、歴史を超越した不名譽の刻印である

と變化の目まぐるしい、直接な社會環境であるといふこと、並びにブルジョア階級によりて文學が革命され、新しい独自の文學が獲得されたと同様に、ブルジョア社會秩序の崩壊は、必然的にブルジョア文學の衰頽を伴ひ、プロレタリアによりて樹立されるであらうところの社會秩序は、プロレタリアの独自の文學をもつてであらうといふことでもあります。

三、階級闘争に於ける文學の位置

私は、社會現象と自然現象との間に截然たる區別をする社會學説にははかに賛成し得られません。社會の進化にも、人間の意志と獨立した、或る程度まで盲目的な必然性があります。これなしには社會科學は成立しません。それと同時に多くの科學者は、實驗室に於て、自然の過程を計画的に人間の意志によりて——勿論自然力を變化させるには他の自然力をかりなければ因果の法則は無意味になつてしまひますが——部分的に變更さしてゐます。生物をも含む一切の物質の電氣的構成が明かにされたならば、人間は、他日、自然力を「不可抗力」と見なす現代を、私たちが神話時代を振りかへるやうな氣持で振りかへることになるかも知れぬと私は思つてゐます。

併しながら、今日に於ては、私たちは、まだ自然力の極めて微少な部分しか征服してゐません。従つて自然現象の進化は、全く私たちの意識の外に行はれてゐるのであります。

これに反して、社會の進化は、個々人の意志と獨立した必然力に支配されてゐるとは言へ、社會そのものが人間の集團であるのですから社會の組織、統制を、その進化に適應せしめてゆくことは人間の力で可能であります。而して、社會の進化に隨伴する社會階級の構成の變革は、各階級群の利害關係、従つて意識を決定します。この意識が、

かのやうに見なすのは、全く歴史に無知な人間の考へであります。ブルジョア階級は、政治の歴史に於て、光輝ある革命的役割を演じてゐるのみならず、思想の歴史に於ても、從來の如何なる階級とも比較にならぬ役割を演じてゐるのであつて、ブルジョアの文學であるがために、無價値であつたり、非人道的であつたりするわけでは決してないのであります。

たゞ、吾々に言ひ得ることは、ブルジョア階級がその使命をはたし、それが社會進化の必然力の前に障礙物としての役割をしか演じなかつた時に於て、はじめ、ブルジョア文學に對する價値の轉換が徐々に行はれ、プロレタリアの意識的、或は自然發生的文學に對抗され、この對抗、この闘争に於て、漸次、ブルジョア文學は、崩壊の過程、若しくはその一特徴たる腐敗の過程を進むものであるといふことでもあります。

而して、かゝる崩壊の過程に於ては、個々人に於ては無意識的であつた闘争が、漸く、意識的、表面的となり、文學に於て赤裸々な階級闘争が行はれることは避け難い現象であります。しかも、この闘争は單に、文學に對する文學の闘争だけにはとゞまらず、對立階級の社會の根本的基礎にまで立入つて批判せんとする傾向が現はれ、所謂社會文學、傾向文學の姿を帯びることも已むを得ないのでありませう。そういう文學に立派な不朽の作品が残るか残らぬかは別問題であつて、かゝる場合には如何なる文學も、闘争の圏外にたつことは不可能となるのであります。嵐の眞最中に、戸外を歩いてゐる人と、堅固な家屋の中に、門戸を閉ざしてゐる人とは、嵐を感ずる程度には相違はあつても、後者と雖も嵐の外におかれてゐるわけでは決してないのであります。

四、日本に於けるプロレタリア文學運動

プロレタリア文學、若しくは第四階級の文學といふ言葉を私がはじめて用いたのは、大正十一年一月の「解放」の論文であつたやうに記憶してゐます。それと丁度同じ月の讀賣新聞に有島武郎氏が同じ言葉をつかつてゐられたのを見出して、私はひとり偶然の暗合に驚いたことがありました。

私の記憶する限りでは、民衆文學といふ文字でなしに、プロレタリア若しくは第四階級の文學といふ言葉がはじめて用ゐられたのはその時分からではないかと思ひます。現に大正十年に私が書いた「民衆文學の理論と實際」といふ論文には、内容はともかく文字に於ては「文學」といふ言葉と「プロレタリア」といふ言葉を一つに結びつけてあるところはありませぬ。

しかしながら、プロレタリア文學の機運は、それよりもずっと以前からあつたのであつて、西村陽吉、加藤一夫、小川未明、秋田雨雀、有島武郎その他の人々によりて、民衆のための文學がさかんに主張されたこと、トルストイやカーペンターやホイットマンなどの民衆文學が、紹介、解説、宣傳されたことは、やがてプロレタリア文學の運動を發生せしめる先驅であつたと見做さなければなりません。

民衆文學とプロレタリア文學との相違點は、前者は、文學が一部選民の末梢神經的産物であつたのを、平易な、多數の民衆にわかるものにしよとする企て、即ち民衆のものとしよとする企てと、虐けられたる民衆に對する人道主義的義憤とから發足してゐるに反し、後者は、プロレタリアの文學的鑑賞力を奪ふやうにさせてゐる社會組織を變更し、更にこの變更のための運動即ち階級闘争に於て、文學も

一の役割を分擔しなければならぬといふ社會理論から發足してゐる點であります。

かゝる主張を具體化して、一のプロレタリア文學運動を起したのは小牧近江氏、金子洋文氏、佐々木孝丸氏、今野賢三氏、村松正俊氏等によりてはじめてられた「種蒔く人」の一派であらうと思ひます。私も中途で、同人の末席を汚すやうになり、つゞいて、青野季吉氏、前田河廣一郎氏、中西伊之助氏、山田清三郎氏、武藤直治氏、佐野袈裟美氏等を加へ、後に、同人制度をやめて(名義上はまだ残つてゐるやうであるが)「文藝戦線」と改題して今日までつゞいてゐます。

その他「熱風」「自由人」「壞人」等同じ目的をもつた色々な同人雜誌が發刊され、大正十一年頃、神田で、これ等の雜誌を中心として、文壇に於ける進歩的傾向をもつた人々が大同團結をするための會合が行はれたことがあります。けれども不幸にしてこれは、機がまだ熟しなかつたために立ち消えとなりました。

最近更に、若い人達の盡力によりて「文學者聯盟」が、同じ目的のためにつくられ、この十二月に大會が開かれるといふことです。

以上のやうなプロレタリア文學のための諸運動は、不満足なものであり、可なりな缺點と弊害とをさへも隨伴したことは争ふべからざることであるが、それにもかゝはらず、文學が、ブルジョア社會秩序の中で、どんな歪みを受けてゐるかといふこと、「永遠文學」「純粹文學」といふものが、たゞ觀念の中で思惟し得られるものであつて、階級社會に於ては、そのまゝの姿で顯現し得ないものであるといふことを相當の人たちに知らせるには十分であつたと言はなければなりません。

五、結論、從來の運動からの教訓と將來への誠め

ための準備を十分にしかゝる必要があります。加ふるに、文學の運動は理論に制約されるけれども、文學の作品そのものは、理論ではないといふことを十分に了得しておく必要があります。社會の遷變期に於いては、舊文化は全く破壊される。併し、破壊されるといふのはトルストイや、ゾラや、ユウゴオや、シェキスピアがすつかり價値を失ふといふことでは決してなく、それらの文學を生むやうにさせた社會的根柢が明かにされ、それが歴史の中へ偏入されるといふことであることも正確に認識しなければなりません。

プロレタリア文學が、一時、鬭争的性質を濃厚にするといふことは正すための運動であり、歪みを正すために、一時エネルギーが歪みと正反對の方向へ集中されることが、それが鬭争的となつたことに外ならぬのです。

これを要するに、從來の文學運動には、相當の價値があつたことを認めねばならぬと同様に、相當な失敗もあつたことをも潔きよく認めなければなりません。これを二つとも認める人でなければ今後の運動はとてできまいと私は思つてゐます。(十一月二十三日)

人目を憚る

黒ン坊が鶏を盗んだといふので告發された。

裁判官(嚴な聲で)「被告には誰か召喚してもらひた

いと思ふ證人はないのか？」

黒ン坊(ほこらしげに胸を叩いて)「ありますもんか。

わしやあ、人の見てる前で泥棒なんかしやせんからな。」

從來この運動から得た結論は、既存の文學者は(無論私などもその中に含まれるのである)社會構成の理論的認識能力が不十分、不正確であり、或は全くこれを拒否するために、確乎たる指導理論によりて運動することは、此等の人々の指導のもとでは困難であるといふことです。しかるに、プロレタリア文學運動のやうな、新しい階級運動には是非ともこれが必要です。明確な理論なしの運動は、嚴密にいへば階級的の運動とはいへないのであります。

次に、少くもこれまでの文學者の多くの人は、生活が不規律でありそれが傳統的にプロレタリア文學運動の人々にも感染してゐます。名人が思ひ思ひの「自由」を尊重しすぎて、一定の規律に服することをきらひます。然るに、プロレタリアの運動には、嚴格な規律が必要であります。

第三に、文學者には、實行的手腕のすぐれた人がありません。

第四に、以下のやうな缺陷のために、プロレタリア文學は、一定の原理に向つて進まずに、その場その場の不平家、野心家、喧嘩すきの足だまりとなるおそれがあります。

第五に、プロレタリア文學といふ概念に、未だに拾收すべからざる混亂があり、或る人は、全く靜的な社會進化理論から、プロレタリアの社會になれば必然的にプロレタリア文學が生まれるのであつて、それまではいくら運動しても徒勞であると思つてをり、他の人はプロレタリア文學とはブルジョア社會を呪つたり、これを罵倒したりする文學であるといふ考へを抱き、更に階級鬭争を個人鬭争にまで發展させて然るべきであるまで考へてをります。

以上のやうな困難は、從來の經驗が吾々に痛切に教へるものであります。

そこで、將來この方面の運動に志ざす人は、これらの困難に立ちつ